

聖書:使徒の働き19章1～20節

説教:主の名によるバプテスマ

はじめに

日本にはかつて昭和という時代がありました。ちょうど私が子どもから大人になっていくときでもあって、高度成長期を迎え、次々と新しい車、電化製品が出て来て、これを買えば幸せになれると宣伝された時代でした。それで皆さんはほとんど買っていった。ではその結果本当に幸せになったのか。本物であるなら一度買ったならもう買う必要はないはず。ところが三年か五年も経てば、新しいのに買い換えなさいと勧められて買い換えることになる。気がつけばその繰り返しです。私はそういうのを見て中学生の頃から疑問を抱くようになってきました。お店で売っている物は人を幸せにできない偽物ではないか。ではどこに本物があるのだろうか。ずっとさがしていた。そんな人間が、あるときキリストに出会い、これこそ本物だとわかったので、今ここに立っているわけです。

パウロの時代も本物と偽物のせめぎ合っていました。ときには生き死にに関わるほど大きな問題であったので人々は真剣に見きわめようとしていた。そのような視点で今日の箇所を見ていきます。

## 1 ヨハネのバプテスマ

### 1) 自分の後に来られる方

パウロはイエス・キリストの福音を伝えるために今のトルコ共和国やギリシャなど地中海沿岸の町々を三回にわたって巡回伝道していきます。そこで救われた人たちが集まり、町には教会が建てられています。しかし教会はまだ生まれたばかりでしたからみな手探り状態でした。エペソもそんな教会の一つです。パウロは、同労者であったアキラとプリスキラを後に残して委ねたのですがとても心残りだったのでしょう。もう一度見にやってきました。そこで何人かの弟子に出会ったので話を聞いてみると、「自分たちはヨハネのバプテスマを受けただけです」と言います。それでパウロは4節でこう説明します。「ヨハネは、自分の後に来られる方、すなわちイエスのを信じるように人々に告げ、悔い改めのバプテスマを受けたのです。」

### 2) イエスを信じるように

洗礼者ヨハネの役割はあくまでも自分の後からやって来られるイエス・キリストに人々を導くことでしたから、罪を告白し、ヨハネの手で水でバプ

テスマを受けたとしても、それではまだ目的の半分しか達成していません。あくまでも最終目標はイエスを信じることにあります。イエスを信じるためにはイエスに出会わなければならない。出会うためには、イエスとはどのような方であるかを聖書のみことばをとおして聞かなければならない。聞いて初めて、ああ、イエスは確かに私の救い主であると信じる事ができるわけです。みなさんもそういうところを通してクリスチャンになりました。

パウロが出会った人たちは、ヨハネのバプテスマは受けたけれど、なぜか肝心のイエスの話を聞くことがなかった。パウロはそのことに気がつき、福音を語り、主イエスの名によってバプテスマを授けました。そうすると人々に聖霊が臨み、異言を語ったり、預言をするようになりました。

## 2 主イエスの名によるバプテスマ

### 1) 主はひとり

そのバプテスマと聖霊のことについてすこし考えます。

まずバプテスマです。正統な信仰に立っている教会であればどこでもそうですが、罪を悔い改め信仰を告白した者に水で洗礼を授けます。私たちの教会では、洗礼は基本的に浸礼のスタイルをとります。水の中に一度沈むことで罪人として歩んできた古い自分が死ぬことを表し、水の中から起き上がることによってイエス・キリストの救いをいただき、新しい人となることを象徴的に表していると説明されています。

エペソ人への手紙4章5節にこうあります。「主はひとり、信仰は一つ、バプテスマは一つです。」どこの教会で洗礼を受けたとしても、主イエスの名によってバプテスマを受けたのなら、私たちはイエス・キリストというひとりの主を信じたのであり、同じバプテスマを受けたことになる。だから同じ信仰に立つことができます。

### 2) 信仰は一つ

この6月に北海道聖書学院の学生たちといっしょにモンゴルに行かせていただいたときのことを思い出します。私にとってモンゴルは、有名力士の出身地であるとか、すこし昔にさかのぼればかつて日本がノモンハン事件を起こした所であるとか、チングスハーンの国とかそういう知識しかない国

でした。それが引率教師という立場で行って来ました。それで何を見てきたのか。モンゴルでも教会が建てられ、礼拝では主を賛美し、聖書のみことばが語られていました。路上生活者を支援している教会に行ってきました。やっぱりそこでも礼拝があり、主を賛美し、聖書のみことばを皆さんが一生懸命聞きに来ていました。

その教会からの帰りがけに、ある一人の女性が証ししてくださったのが印象的でした。かつて自分も路上生活者をしていたと言うのです。冬はマンホールの下で暮らし、ゴミをあさり、鉄くずを拾って売ったりして希望もなく生きていた。それが主に会って人生が変えられ、今度は自分が路上生活者を支援する働きをしていると言っていました。その方の表情を見ただけで、それが嘘ではない、本当にこの方は主にあって変えられた方であるとわかりました。

私たちが聞いているのとは異なる別の福音がそこで語られていたわけではない。語られていたのは私たちが聞いているのとまったく同じみことばです。国籍もことばも地域も国も全く関係ない。日本にいただけではあまり考えなかったことですが、外に出て信仰は一つであることを実感いたしました。

### 3) 聖霊を受ける

さてそのように十二人がバプテスマを受けると聖霊が臨んだとあります。パウロの時代、信じて主イエスのバプテスマを受けると異言を語ったり、預言をしたりというような明確な聖霊の働きが見えたようです。では今の時代はどうか。これについてはさまざまな議論があります。私たち福音派では、聖霊の働きについては聖書に書かれているとおりに今の時代もまったく変わらないと考えます。ただ、異言を語るとか預言するというような現象は神の主権の中で起きる可能性はあるとしますが、ことさらに目に見えるようなことは強調しない。そういう立場を取ります。

そうしますと聖霊の働きはどうしても目に見えにくくなる。でも、聖霊はおられるはず。どうやって見分けるのか。

具体例を挙げましょう。この教会に聖霊の風は吹いているのだろうか。さあ、どうやって見分けるか。何か特殊な能力が必要なのか。そんなことはありません。もし聖霊の風が吹かなければどうなるか。水槽の中の金魚と同じです。呼吸が苦しくなる。口をパクパクさせます。それと同じで、教会に入って息がつまると感じるはず。空調が悪い

のでなければ、聖霊が働いていないということになる。それとは逆に自由さを感じるならば聖霊の風が静かに吹いている。教会というところはそういうところ。です。

あつてはならないことですが、時々教会が息苦しくなることがあります。どうしてそうなるのか。突き詰めれば問題は単純です。本物がなくなるからです。当たり前のことですが偽物には聖霊は働きません。いつの間にか偽物とすり替わってしまったのです。

### 3 本物か偽物か

#### 1) 偽物で戦おうとしたユダヤ人巡回祈禱師

その例が13節以降に書かれています。ユダヤ人の巡回祈禱師がたまたまパウロの話聞き、悪霊につかれている人たちに向かって試しにこう言ってみた。13節。「パウロの宣べ伝えているイエスの名によって、おまえたちに命じる。」これに対し悪霊は言い返します。15節。「イエスのことは知っているし、パウロのこともよく知っている。しかし、お前たちは何者だ。」巡回祈禱師は悪霊を追い出すのが商売だったので、この後ひどい目に遭わされて逆に家から追い出されてしまいました。悪霊は、イエスもパウロも本物であることがわかり、巡回祈禱師は中身がない偽物である、そんなふうに見抜く力を持っていました。

ところが人間はどうか。この巡回祈禱師のことを笑えません。たとえばお店に行くとカツオが入っていないのに「カツオ風味」と言って、あたかもカツオが入っているかを装っている商品がたくさんあります。カツオが入っているかないかでのちには関わらない、おいしいければそれでよいというこかも知れない。でも悪霊に対してはそうはいきません。中身のない「イエス・キリスト風味」ではまったく勝つことはできない。負ければ大変なことになる。本物でなければなりません。

#### 2) 本物をいただく私たち

「でも私たちは悪霊と戦うことはほとんどないのだから、あまり気にしなくてもよいのでは」と言うでしょうか。でもパウロはこう言っている。「私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊に対するものです。」(エペソ6章12節)

普段はあまり意識していなくても、この世で生きていくかぎりクリスチャンは、「暗闇の世界の支配者」、「天にいるもろもろの悪霊」と戦うこ

とになると書いてあります。こう言うと、急に不安になったかもしれません。大丈夫です。私たちは自分ひとりで戦うのではない。主がともにいてくださいます。そして何も持たずに戦うわけでもない。強力な武器を手をしている。「救いのかぶとをかぶり、御霊の剣、すなわち神のことばを取りなさい。」(エペソ6章17節) 巡回祈禱師たちを見てください。彼ら主を信じていませんから救われていなかった。イエスの名によるバプテスマも受けていないから、御霊の剣もない、神のことばも知らない。なににもないのに外側だけ真似をした。負けるのは当然です。

でも私たちは違います。主によって救われている。それに伴って御霊の剣もいただいている。ですから、もし戦いがあっても恐れることはない。なにしろ本物を手にしているからです。

でもどうやって本物を手に入れるのでしょうか。18節に書かれています。「そして、信仰に入った人たちが大ぜいやって来て、自分たちのしていた行為を告白し、明らかにした。」

本物をなのだから大変勉強をして努力をしないと手に入らない、というのではない。誠に単純です。主に罪を犯しましたと告白し、悔い改める。もっとも恥ずかしくて最も隠しておきたいことを、ひとつひとつ取り出して主に申し上げていく。「いや、それはできない」と言う方もいるでしょう。でも、もし子どものようになれるなら誰もだができる。神はそれを待っておられる。

罪を告白すると言うことは、自分が一番みじめに感じる時でしょう。でもそのとき驚くべきことが起きます。主が私たちの罪を引き受けてくださって、ご自身のいのちを十字架でお捨てになり、私たちに本物のいのちを与えてくださる。聖霊を与えてくださる。私たちがいただいている本物のいのちをだれも取り去ることはできない。そのようにしてくださるそれが主である。そのような主に出会えたとき、私たちは他に何もいらぬ。19節にあるように高価なものを手放して火で焼いても全く惜しいとは思わない。

私たちはすでに本物をいただいていた。そのようにして下さった主の御名をあがめます。